◆ 講演とパネルディスカッション ◆ 鎌倉世界遺産登録推進協議会主催 ◆

「鎌倉と平泉の歴史と文化 ～頼朝と義経をめぐって」

平成24年6月3日（日）、鎌倉世界遺産登録推進協議会主催・いざかまくらトラスト共催で、世界遺産・平泉に学ぶシンポジウムが開かれました。世界遺産登録実現に力を尽くされた元・平泉町世界遺産推進室の八重樫忠郎さんの基調講演のあと、大河ドラマ「平清盛」で時代考証を担当されている本郷和人・東京大学史料編纂所教授と伊藤正義・鶴見大学教授（コーディネーター）が参加して、会場の質問に答えるパネルディスカッションが行われました。以下は講演とパネルディスカッションの要旨です。

八重樫忠郎さん講演

◎「世界遺産・平泉」

お陰様で平泉は世界遺産に登録されたが、学生のころから鎌倉をよく知っている私としては、鎌倉こそが登録されるべきであると思っている。世界遺産と鎌倉の話をしてみたい。

平泉の四代藤原泰衡は、源頼朝と戦ってさらし首となった。その首は、藤原三代のご遺体（ミイラ）とともに、今も金色堂に納められている。その首桶の中には、たくさんのハスの種が入っていた。現在の科学力によってその種は、発芽し平成10年に開花している。現代に蘇ったこのハスは、「中尊寺ハス」と名付けられ、平泉のシンボルとなった。

記録によれば、前九年合戦、後三年合戦、そして平泉藤原氏を滅ぼした奥州文治合戦によって、源氏は武家の棟梁の地位を確立したという。その後三年合戦絵巻の中、八幡太郎義家の後ろに編み笠をかぶりひっそりと立っているのが、平泉の開祖、藤原清衡といわれる。清衡は、源氏が去った後、戦争責任を一身に背負うことになり、自らの肉親を失ったこと以上に荒廃した大地を見て、悔恨の念を抱き、深く仏教に傾倒し、中尊寺建立へと向かっている。

『中尊寺建立供養願文』には、「官軍夷虜之死」を弔うとあり、敵味方を差別しない供養が、鎌倉に先立って行われた。世界遺産として評価された点である。そのような寺院群の荘厳に触発され、平泉から帰った頼朝は、永福寺を建立した。

◎住民との合意形成

世界遺産に関して多く方々が視察に訪れるが、どこでも問題視しているのが、住民との合意形成である。平成13年に世界遺産暫定リストに登載されて以来、それらについて努めてきたが、特に景観条例の検討委員会は紛糾した。それでも検討開始以来2年を過ぎたあたりから軟化をはじめ、「子供たちの将来に良い景観を残せるならば、条例による規制をあえて受けよう」という声が上がり、現在に至っている。

パネル・ディスカッション

伊藤　平泉と鎌倉をつなぐキーパーソンは頼朝と義経。藤原秀衡はなぜ、義経を受け入れたのか?

本郷　日本は一つの国だと思っているが、鎌倉時代はひとつではない。現在、2つの学説がある。ひとつは京都の「権門体制論」でひとつの王権、上に天皇がいて、その下に武家と公家、寺家があるというもの。これに対して「東国国家論」というのは、二つの王権で、東に将軍、西に天皇が並び立っているというもの。私は、これを三つの王権論に進化させられると気づいた。西と東と北、それがずっと続いて、豊臣秀吉の天下統一のときか、あるいはもっと下って戊辰戦争まで続く。義経は源氏の貴種で、貴種は大切にされたが、 頼朝と袂を分ったあとも受け入れたのは、いずれ平泉は頼朝と雌雄を決する時がくると覚悟していたのかもしれない。

八重樫　国内で初めて登録延期になった時、がっくりして帰ってきた私を、世界遺産に反対していた人達が率先して慰め、どうすれば登録されるのかと聞いてきた。あの時以降、町は本当に一つになって登録に向かっていったと感じている。

伊藤　頼朝は平泉の政権の雛形や遺産を持って帰って鎌倉幕府の基礎を作った。平泉は鎌倉の兄だ。皆さんにぜひお願いしたいのは、平泉に行って、今、平泉の町がいかにきれいで素晴らしい「世界遺産のまちづくり」をしているか、学んできてほしい。

パネル・ディスカッション風景

コラボ企画として、『世界遺産・平泉』と『武家の古都・鎌倉』の写真展をきらら鎌倉のロビーで開催しました。（6月6日－12日）